

Reviewing the Five Years (2011-2015) of MULC

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kuis.repo.nii.ac.jp/records/1356

多言語コミュニケーションセンター 2011-2015 年度の活動と展望

藤田 知子

0. はじめに

多言語コミュニケーションセンター (Multilingual Communication Center, 愛称 MULC、以下「マルク」と略記) は、神田外語大学に 2008 年にオープンした英語以外の言語の自律学習支援施設である¹。英語の SALC「サルク」とペアになって、海外に旅したり留学する感覚を味わいながら、12 の言語と文化に接することができる疑似留学空間である。創設期を経て、マルクの活性化をめざした 2 年半 (2008 - 2010 年度) についてはすでに書いたものがある (cf. 藤田 2011)。本稿ではその後のマルクの活動 (2011-2015 年度) をふりかえりながら、2011 年度から受給した神田外語大学研究助成の成果を報告したい。

1. 教材ソフトの充実とデータベース構築

本学はマルク創設時から 3 年間、文科省から「戦略的大学連携」支援プログラムの助成を受けた²。その助成により、開館当初は建物だけだったマルクに、多言語教育と多文化理解に役立つ教材を備えることができた。マルクは現在、多言語教材ソフト (書籍、DVD、CD など) を 8000 点、文化的教具 (民族衣装、楽器、ゲーム、人形、茶道具など) を 1000 点ほど保有している。それらが少しず

¹ <http://www2.kuis.ac.jp/mulc/>参照。

² 2008 年から 2010 年度まで、神田外語大学は千葉大学主導のもと、敬愛大学、城西国際大学とともに、「ユニバーサルコミュニケーションのための教養教育に向けた千葉圏域コンソーシアム」を結成し、教養教育の充実をはかった。

つエリアを飾り、学生がネイティブの先生から楽器や踊りの指導を受けたり、外国語の本を手にとったり、民族衣装を着たりするようになると、想像していた以上に現地らしい豊かな彩りと生活感が生まれた。「日常のことば・暮らし・アート」というマルクの基本理念が、各エリアごとに鮮明に感じられるようになったのである。

ところで、教材の目録は文科省への報告義務があり、当初は、書名・品名・購入先・価格等を記録した単なる物品目録として作られた。そこで教育目的で利用できるように、書名を各言語の文字で表記し、和訳を付けて管理し、いずれは学生への図書貸出しに役立てたいと考えた。そのため神田外語大学研究助成を受給し、多言語・多文化教育／学習のためのデータベース構築にとりかかった³。

マルクに設置した教材ソフトには特徴がある。基本的に、ある言語文化圏に生まれた子供が青少年になる過程で接するさまざまな書籍や視聴覚ソフトを中心に選書している。初修言語の学生は子供ではないが、学習言語について大人のリテラシーはもっていないからである。外国語学習において初級から中・上級への橋渡しとなるような、学生にとってアクセスしやすく、手にとること自体が楽しい、いわばビジュアル系の書籍を中心に選び、図書館の蔵書との差別化を図った。

具体的には、絵本、童話、図鑑、読み物、百科事典、辞書、各国事情、料理、スポーツ、日本のマンガや物語の各国語訳、それぞれの言語で書かれた日本事情や日本語教科書、さらに歌、音楽、映画、語学教材のCD、DVD、CD-ROMなどである。こうした教材は日本では入手できず、教員が直接現地に赴いて購入したものが多く、とくにタイ語、ベトナム語、インドネシア語、スペイン語、ポルトガル語、アラビア語など、現在の日本では流通があまり多くない言語については、書誌データのほとんどすべて、もしくは、その大部分をマルクが自力で入力した

³ 神田外語大学研究助成金(共同研究)「多文化・多言語教育／学習のためのマルチメディアデータベース構築研究」(2011年4月～2014年3月。研究代表者：藤田知子／研究分担者：布川雅英、青砥清一、平香織、吉野朋子、春日淳、スヨト、ボンシー・ライト、菊池達也、倉館健一)。

ければならなかった。

その際、専門知識をもつ各言語の研究分担者によるスペルチェック、および、タイトルなど必要事項の和訳が必要である。わずか12言語とはいえ、8000点を越える書誌データをもれなく処理するのは大仕事である。試行錯誤を重ねながら、2013年度末にExcelへの入力と検証作業を終え、基礎データが完成した。

一方、学生への貸出しについては、新たな課題が生じた。図書館の蔵書管理システムが、2014年度中に、従来の「情報館」から「iLis アイリス」に変更されることになったのである。学生が図書館の本を借りるのと同じ手続きで、マルクからも本を借りられるようにするには、図書館のシステムにマルクのシステムを一致させなければならない。

そこで、図書館の協力を仰ぎながら、Excelのデータをアイリスに変換する作業にとりかかった。だが、システムの停止、データの消失など、さまざまなトラブルに見舞われ、いっこうにはかどらない。そのため、研究期間の延長を申請し、2014年3月によりやくアイリスへの移行を完了した。さらに、図書貸出しコーナーをマルク事務局横に新設し、2015年4月から学生への貸出しを開始することができた。

今のところ、学生のニーズが高い語学能力検定試験の問題集などを中心に、限られた冊数しか貸出しておらず、利用は少ない。今後、少しずつ貸出し冊数を増やし、マルクの蔵書の基本コンセプトである「ネイティブの子供が青少年になるまでに接する書籍」にまで範囲を広げていきたい。

マルクの活動は圧倒的に「話す」「聴く」を中心に行われている。だが、言語の4能力は強く連関するものであり、「読む」力の向上は、スピーキングとリスニングの強化につながる。今後は、各言語の授業でマルクの図書を活用してもらうなど、授業との連携をはかりながら、学生が多言語の書籍に親しむ機会を広げていくべきであろう。

2. マルク利用に関するアンケート調査

ところで、マルクは学生の利用状況を把握するため、2010年度以降、毎年アンケート調査を行なっている。学生は大きく(1)地域言語専攻、(2)英語専攻に分かれ、マルクの利用パターンも異なる。そこで、地域言語専攻の学生が履修する「地域言語科目」と、英語専攻生が多い「選択外国語Ⅰ」(＝第二外国語、初級)の授業中にアンケートを実施した。最新の2014年度について言えば、地域言語クラス522名、選択外国語Ⅰクラス414名、合計936名の学生から回答を得た。本学の学生数は4000名弱であるから、網羅的ではないが、およその動向を知るには十分な資料と言えよう。

2.1. 地域言語専攻生の利用状況

まず地域言語専攻の学生から見ていこう。

■表1：来館頻度

	回答数	%
毎日	105	20
週2～3日	101	19
週1日	71	14
あまり利用しない	152	29
まったく利用しない	93	18
計	522	

■表2：来館時間(複数回答可)

	回答数	%
空き時間	251	42
昼休み	224	38
一日の授業終了後	122	20
計	597	

■表 3：滞在時間

	回答数	%
30分以内	73	20
31～60分以内	151	41
61分～90分以内	108	29
91分～120分以内	27	7
121分以上	12	3
計	371	

大学に来たら学生はまず授業に出席する。学生がマルクにやってくるのは授業以外の時間帯である。表 1、2 に見るように、地域言語専攻のほぼ 40%の学生が週に 2 日以上頻度で、授業と授業の空き時間、昼休み、放課後などに来館している。表 3 が示すように、いったん来館すると、1 時間以上滞在する学生がほぼ 40%を占めている。放課後は部活やアルバイトをする学生が多く、遠距離通学者も少なくない。こうした点を考慮すると、地域言語専攻の学生はかなりよくマルクを利用していると言えるだろう。

■表 4： 来館目的（複数回答可）

	回答数	%
友達と話す	318	33
自習	168	18
留学生と話す	147	15
ネイティブの先生と話す	142	15
食事	115	12
インターネットの利用	20	2
エリアでのイベント参加のため	19	2
本、雑誌などを読む	15	2
その他	14	1
計	958	

来館目的を見ると、マルクはまず何よりも授業以外の時間を過ごすための「癒しの場」として活用されていることがわかる。日本語も使用できるし、飲食も自由である。昼休みに昼食をとりながらリフレッシュし、午後の授業に臨む。こうした利用パターンがもっとも多い。語学の必修授業では教師と同学年の友人にしか会わないが、マルクには先輩、後輩、留学生が来ている。学生の声を「マルク通信」⁴から拾ってみよう。

★初めて MULC に行ったとき、"¿Que onda?"（調子はどう？）と挨拶されたのです。教科書に載っていない表現で驚きました。このときから、1年生のときは毎日、MULC に通いました。ただ、MULC に来るだけでは語学力は伸びません。スペイン語に触れる機会を、自分から作っていくことが必要でしょう。目的を持って MULC に来る、それが語学力が上がる近道だと信じています。（2014年スペイン語専攻）

★先生は、初級の学生にも韓国語だけで単語や文法を説明します。それなのに理解できることにちょっと感動しました。そして、入学したときからずっと見てくださった先生から、「一年生のときと比べたら、本当に上達したね」と言われたときは嬉しかったです。（2012年韓国語専攻）

★入学して間もなく、留学生に「先生は？」と聞くと、「お祈りしているよ」と言われました。ムスリムが一日に5回お祈りをするのは、知識としては知っています。でも、このとき初めてムスリムを身近に感じました。うまく言えませんが、とても不思議な気持ちになったことを覚えています。（2013年インドネシア語専攻）

★タイの留学生を見ていると、先生をとっても尊敬する文化だということがわかります。わたしたちもそれに習って、先生に接するようにしています。（2011年タイ語専攻）

⁴ マルク事務局が毎月発行するミニコミ誌。新学期に増刊号を発行。

- ★留学生とは、ポルトガル語と日本語で話します。彼らは日本語を勉強しているので、お互いのことばを教え合うのです。(2012年ポルトガル語専攻)
- ★ベトナム語エリアは私の「家」です。先生や留学生とは、勉強のことから恋愛事情までさまざまなことを話します。会話している途中で単語や文法を直されると、もっと頑張らなくちゃと改めて思います。(2011年ベトナム語専攻)
- ★留学生が読み聞かせを行ってくれることもあります。中国語で語ってくれるので勉強になりますし、自分のレベルを再確認することができます。ネイティブの人と話す、リスニングの勉強以上の良い刺激になるのです。(2013年中国語専攻)

マルクにいと、当該外国語、日本語、英語など複数の言語が入り混じって聞こえてくる。教室とはちがう、気のおけない多言語と多文化のコミュニケーションが行き交っている。こうした日常の使用に加えて、各エリアが開く文化イベントも大きな来館理由となっている。2014年度は50回もの文化イベントが開かれた⁵。このように地域言語専攻の多くの学生にとって、マルクは(1)アットホームなたまり場、(2)外国語の談話空間、(3)イベントへの参加の場となっていることがわかる。

だが、あまり利用しない、もしくは、まったく利用しないという回答も半数に近い。理由を聞いてみると、時間がない、行く必要を感じない、排他的な雰囲気があるなどを挙げている。外国語の自律学習支援施設につきまとう「行きにくさ」は、次に見る英語専攻の学生の場合、さらに顕著になる。

⁵ 各言語文化圏の年中行事。たとえば韓国のお正月、タイの水掛け祭、インドネシアのカルティニの日、ベトナムの端午の節句、中国伝統の水餃子作り、ブラジルのカーニバル、スペインのクリスマスなど。さらにカラオケ大会、語学専任講師・留学生・学生の歓送迎会なども行う。

2.2 英語専攻生のマルク利用

■表5： 来館頻度

	回答数	%
毎日	3	1
週2～3日	7	2
週1日	8	2
あまり利用しない	62	15
まったく利用しない	334	80
計	414	

■表6： 来館時間帯（複数回答可）

	回答数	%
空き時間	27	46
昼休み	23	39
一日の授業終了後	9	15
計	59	

■表7： 滞在時間

	回答数	%
30分以内	33	51
31～60分以内	18	28
61分～90分以内	10	16
91分～120分以内	1	2
121分以上	2	3
計	64	

■表8： 来館目的（複数回答可）

	回答数	%
友達と話す	41	21
留学生と話す	26	13
ネイティブの先生と話す	23	12
本、雑誌などを読む	23	12
食事	20	10
自習	18	9
その他	43	23
計	194	

表に見るように、英語専攻の学生の80%がマルクをまったく利用していない。理由を尋ねると、英語専攻だから行く必要がない、知り合いがいない、排他的な雰囲気を感じる等の答が返ってくる。本学には英語の自律学習支援施設 SALC⁶があるから、英語専攻であれば SALC に足を運ぶのは当然である。だが、本学に入学した以上、英語専攻でもマルクに来て一定の時間をすごし、英語以外の言語文化に触れてほしいものである。

もちろん、英語専攻でマルクを積極的に利用する学生もいる。「マルク通信」から引用しよう。

★T 先生は、ぼくが初めて MULC に足を踏み入れたときに声をかけてくださった先生です。中国語スピーチコンテストに出ようと決めたとき、朗読の練習につきあっていただきました。

「あたりまえのことだけど、外国語を話すときには発音が大事だよ。こうやって練習しているのは、これからネイティブと会話するときに必要な力になるから」。思うように発音できず苦しんでいたとき、そう言われました。きれいな発音でゆっくり話していただけたのは、ありがたかったです。

いまは、A 先生の「中国語 III」を取っているので、中国語エリアでは、中国語のことだけでなく、就職活動、将来自分のやりたいことや自分像について話すこともあります。(2011年、英語専攻)

スピーチコンテスト終了後も中国語を学び続け、マルクを自己のモチベーションを高める場として活用していることがわかる。

英語専攻の学生がマルクで文化イベントを企画することもある。ベトナムに短期留学して帰国した英語専攻の学生たちが、ベトナム・エリアで「シントーを飲もう」というイベントを開催した。シントーは、フルーツ、練乳、氷などをミックスした夏を代表する飲み物で、ベトナムではいたるところにその屋台が見られ

⁶ <http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/facilities/bldg6/salc/>参照。

るという。ベトナムの夏の風物詩が英語専攻の学生の手でいつときマルクに再現したのである。(2014 年秋)

学生の発案によって、専攻を越えた交流イベントが開かれることもある。

★ブラジル・ポルトガル語専攻の2人の1年生がきっかけでした。自分のエリア以外の学生とも交流したいと、一番遠いタイ語エリアの学生に声をかけたのです。他の言語エリアでも賛同する人がどんどん出てきて、10月11日、エリアを横断する交流会が開かれました。空き時間が学生それぞれ違うため、2部構成で行われましたが、90名が参加。後期に来日したばかりの留学生たちも加わって、さまざまな情報交換を行いました。(2013 年秋)

このように、自分の専攻言語を越えて他の言語や文化にも強い関心をもつ学生が増えてきている。うれしいことであり、こうした事例がさらに増えていくことを期待している。だが、マルクに一度も足を踏み入れない多くの英語専攻生に向けて、何かできることはないだろうか。

3. マルク・ヴィジットの開始

そこで、2014年2月から「トライ・外国語科目」の授業を活用して「マルク・ヴィジット」(MULC VISIT)を始めた。トライ・外国語とは、英語以外の12の外国語の言語と文化を入門体験する講座であり、長期休暇中に集中講義として開講することが多い⁷。履修生の大半を英語専攻の学生が占めている。担当教員に依頼し、授業の1コマか半コマを使って、クラスごと学生をマルクに連れてきてもらった。少しだけ予算をとって、それぞれの国のお菓子やお茶を用意し、マルクの当該エリアで教師を囲んでティータイムを楽しむのである。

実施した教員に感想を聞いてみた。「トライ・ポルトガル語」では、「学生の評判が良く、期待以上の反応が得られた。教室では質問がほとんど出ないが、マル

⁷ 2002年度より開講。トライ・外国語の初期の様子は藤田 2006, 525-528 参照。

クではいろいろな質問が出た。お菓子効果もあるだろうが、マルクに慣れていない多くの学生は、ブラジル・エリアという『非日常空間』を体験して気分が高揚するらしい。観光地を訪れているかのように写真を撮る学生が多かった。

「トライ・中国語」では、「1 コマを利用して、中国エリア見学と中国文化体験を行った。中国の茶菓子を楽しみながら、中国が多民族国家であることを実感できるように、少数民族の衣装を実際に着てもらった。さらに、ネイティブの教員が中国茶の入れ方など、日常の様子を紹介した。今後は、マルクにある備品や書籍を教員が中国語で発音し、それに対応する備品や本を学生が探し出すといったクイズ的要素も取入れたい」。

「トライ・フランス語」では、フランスのお菓子やチーズを楽しみながら談話した。そして、フランス語の教材ソフト（本、DVD、CD）から気に入ったものを1～2点選ばせ、フランス語や日本語のタイトルを書き写し、感想を書いてもらった。ついでに、建築造形がある7エリアすべてを見学した。全エリアを訪ねるのははじめてのことが多く、歓声をあげる学生が少なくなかった。

こうした12の言語と文化のミニ体験を、現在はトライ・外国語だけでなく、週2回学ぶ「選択外国語科目」のいくつかのクラスでも実施している。学生たちに感想をきくと、「別の言語のトライ・外国語も学んでみたい」「来年度は同じ言語の選択外国語クラスに入って、週2回しっかり学びたい」「いま学んでいる選択外国語を来年度も続けたい」といった声が出てくる。マルク・ヴィジットは多言語・多文化学習の意欲を引き出し、通常の授業にも良い刺激をもたらす可能性がある。2015年5月には、担当教員向けに、これまでの実践例を集めた「マルク・ヴィジット・ガイド」⁸を作成した。

⁸ 他の実践例として、マルク・ヴィジットの時間を留学生の空き時間と合わせ、留学生と会話させる（ベトナム語）、郵便物や生活用品など、現地の言葉で書かれた物を用意し、その翻訳や説明などを行う（アラビア語）、当該言語でマルクにまつわるクイズ（マルクのスタッフは何人ですか？、マルクは何階にありますか？等）を用意し、答をマルクの中から探させる（スペイン語）など。

言語学者の黒田（2013、238-241）は、外国語学部生について、在学中から4つの外国語の学習を視野に入れるよう奨めている。まず何よりも専攻外国語。2つ目に専攻言語と同系の外国語。3つ目に英語。そして、4つ目に専攻語を考慮しながら、広域で使用される有力語、たとえば、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、中国語、アラビア語などの学習を推奨している。そして、とくに英語を主専攻とする場合、最初と3つ目の言語が同じであることをよく考えてほしいと述べている。

こうした黒田の観点からも、外国語学部生の学びの裾野を広げ、多言語の視野を広げるために、本学の学生にはトライ・外国語科目とその特別講座⁹をもっと活用してほしいものである。

現在のグローバル社会では、英語専攻の学生も卒業後アジア、南アメリカ、ヨーロッパ、中東、アフリカなどの非英語圏で働いたり、旅する機会が増えるだろう。在学中に英語以外の言語を学び、その背景にある生活文化の魅力に気付いておくことは、卒業後の長い人生への「種蒔き」として価値あることである。多言語の学びは、自分の母語と、専攻外国語を相対化し、ささやかながらもう一つか二つの異なる世界に分け入る近道ともなりうるのである¹⁰。

4. マルク講演会とマルク映画鑑賞会

マルクは全学生向けの催しとして、講演会を年2回、映画鑑賞会を年4回主催している。両方とも隣接するクリスタルホールでおこなう。

⁹ 「トライ・外国語特別講座」は2007年度より開講。常設の12言語以外の言語で、日本では学ぶ機会が少ない言語の中からアジアの言語を一つ、その他の地域の言語を一つ、合計2言語を多くの場合、外部から講師を招いて開講している。これまで、ペルシャ語、広東語、ミャンマー語、オランダ語、スワヒリ語、チェコ語、ヒンディー語、ブルガリア語、カンボジア語、トルコ語、フィリピン語、フィンランド語、モンゴル語、アムハラ語、カタルーニャ語、テト語、バスク語を開講した。また、言語を広い視野から捉える「トライ・ことばと文化」は、これまでにアイヌ語と手話を開講した。

¹⁰ 川田(2010)が主張する「文化の三角測量」にも通じるものがある。

4. 1. マルク講演会

講演会は講演とフロアとの質疑応答をあわせて授業1コマ(90分)で行っている。テーマは言語とコミュニケーションの他に、本学で学生が触れる機会が少ない地域や分野を積極的に取り上げている。たとえば、専攻がないアフリカや北欧などの地域、文系大学のため授業そのものが少ない理系の分野などである。講師は外部から招聘することが多い。2011年度以降のラインナップは次のようであった¹¹。

第3回 2011年7月 泉邦寿(上智大学 名誉教授)

「ことばとことばが会うとき～媒介言語論のはなし」

第4回 2011年11月 大井玄(東京大学 名誉教授)

「エイズと文化～アジア・アメリカ・アフリカの例から¹²」

第5回 2012年5月 井上輝夫(詩人/慶応義塾大学 名誉教授)

『紅の豚』～その主題と歴史的背景¹²」

第6回 2012年12月 シルビア・ゴンサレス(本学教員)

(通訳:寺尾隆吉(フェリス女学院大学))

「ヒロシマと芸術～イベロアメリカの視点から」

第7回 2013年6月 大島希巳江(文京学院大学/英語落語家)

「英語落語に世界は笑うのか?～笑いと文化をいざ発信!」

第8回 2013年12月 菊地達也(東京大学大学院人文社会系研究科)

「イスラム少数派とシリア内戦」

第9回 2014年4月 黒田龍之助(フリーランス語学教師/本学非常勤

講師) 「外国語の世界の歩き方」

¹¹ 以下、所属は当時のものを記載。

¹² 講演記録として執筆を依頼し、下記の学内刊行物に掲載した。大井玄(2012)「エイズと文化」、『国際社会研究』no.3、(神田外語大学グローバル・コミュニケーション研究所発行)、pp.175-187./井上輝夫(2014)「宮崎駿監督『紅の豚』、その主題と歴史的背景」『神田外語大学日本研究所紀要』6、pp.118-138。

第10回 2014年10月 小川さやか (立命館大学先端総合学術研究所)

「もうひとつのチャイニーズ・ドリーム

～中国-アフリカ間の模造品交易」

第11回 2015年5月 スエナガ・エウニッセ

(ポルトガル語翻訳・通訳者、日本古典文学研究者)

「村上春樹の翻訳から見えてきた日本・ブラジル」

第12回 2015年10月 大石雅寿 (国立天文台・天文データセンター)

「宇宙と生命：我々は宇宙と繋がっている」

講演を聴いた学生が興味をもち、さらに深く知りたくなることを期待して、講演者には前もって関連文献(図書、映画・ドキュメンタリ DVDなど)を10点ほどリストアップしていただく。そして、講演会の前後一ヶ月ほど、図書館の関連図書特設コーナーに展示してもらっている。学生の反応は決して悪くない。マルク映画鑑賞会についても同様である。

4.2. マルク映画鑑賞会

映画ほど多言語・多文化の世界を知るのに適したメディアはない。自分が知らない世界や時代にワープし、他人の人生を合法的にのぞき見ることを許されるのが映画である。マルク映画鑑賞会では上映の前後に、専門知識をもつ教員が作品の時代、社会、言語などについて解説する。フロアの学生との質疑も行う。映画を観る楽しさと、専門家の解説による学びの合体を目指し、教室での授業の枠組みをこえた教育活動として位置づけている。2011年度以降の上映作品は次の通りである。

第5回 2011年6月 「グラン・トリノ」(2008年/アメリカ)

解説：エイチャン(本学教員)

第6回 2011年10月 「王様と私」(1956年/アメリカ)

解説：重富スパボン(本学教員)

多言語コミュニケーションセンター
2011-2015年度の活動と展望

- 第7回 2011年11月 「セントラル・ステーション」(1998年/ ブラジル)
解説: 高木耕 (本学教員)
- 第8回 2012年6月 「Obachan's Garden おばあちゃんのガーデン」
(2001年、カナダ)
解説: リンダ・オーハマ (日系カナダ人映画監督)
- 第9回 2012年7月 「ペルセポリス」(2007年/ フランス)
解説: 菊地達也 (本学教員)
- 第10回 2012年10月 「かもめ食堂」(2006年/ 日本・フィンランド)
解説: 稲垣美晴 (エッセイスト・翻訳家・「猫の言葉社」代表)
- 第11回 2012年10月 「インビクタス～負けざる者たち」
(2009年/アメリカ・南アフリカ)
解説: 牧野久美子 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)
- 第12回 2013年5月 「カーサ・エスペランサ～赤ちゃんたちの家」
(2003年/メキシコ・アメリカ)
解説: 柳沼孝一郎 (本学教員)
- 第13回 2013年6月 「ベッカムに恋して」(2002年/ イギリス)
解説: 松井佳子 (本学教員)
- 第14回 2013年10月 「スパングリッシュ
～太陽の国から来たママのこと」(2004年/ アメリカ)
解説: 柳沼孝一郎 (本学教員)
- 第15回 2013年11月 「スラムドッグ\$ミリオネア」(2008年/ イギリス)
解説: 山形辰史 (日本貿易振興機構アジア経済研究所)
- 第16回 2014年7月 「HAFU ハーフ」(2013年 /日本)
解説: 神崎正哉 (本学教員)
- 第17回 2014年9月 「コーリャ 愛のプラハ」(1996年 /チェコ)
解説: 金指久美子 (東京外国語大学)

第18回 2014年12月 「汚れた心」(2011年 /ブラジル)

解説：高木耕(本学教員)

第19回 2015年6月 「風立ちぬ」(2013年 /日本)

解説：土田宏成(本学教員)

第20回 2015年7月 「それでも夜は明ける」

(2013年 /イギリス・アメリカ)

解説：黒崎 真(本学教員)

第21回 2015年9月 「独裁者」(1940年 /アメリカ)

解説：水野孝昭(本学教員)

第22回 2015年11月 「ジョイ・ラック・クラブ」(1993年 /アメリカ)

解説：花澤聖子(本学教員)

映画の上映はふつう90分以上かかる。解説と質疑応答をいれると、授業1コマ(90分)の枠を軽く越え、2コマに近い時間が必要になる。参加する学生の満足度は非常に高いが、長時間にわたるため、参加者はそれほど多くない。映画は一生楽しめる市民の娯楽であり、外国語だけでなく、人生を知るためにも欠かせない「第7の芸術」である。外国語学部には専門分野をもち、かつ、映画が好きな教員が少なくない。こうした利点を踏まえて、今後、マルク映画鑑賞会の試みをカリキュラムに発展的にとり入れ、映画に関する縦2コマの授業として単位化することも検討に価すると考える。

5. 最後に

7年の時を経て、マルクは多言語の自律学習支援施設として成長し、活動を続けてきた。ここまで来ることができたのは、各言語の語学専任講師、各言語専攻の教員、職員の方々の惜しみない尽力によるものである。感謝に堪えない。

マルクはセンターであり、研究所ではない。だが、今後に残された課題を挙げ

るならば、語学専任講師が教育業務をこなしながら、外国語教材の製作、教育実践報告や研究論文の執筆など、研究業績も上げられるような体制を強化することだと思われる¹³。神田外語大学がそこで仕事をする人たちを真に大切にす組織として発展していくことを願っている。

[参考文献]

- 川田順造(2010)『文化を交叉させる～人類学者の眼』青土社、240p.
- 黒田龍之助(2013)『ぼくたちの外国語学部』三修社、260p.
- 藤田知子(2006)「外国語学部における外国語教育活性化の試み--「選択外国語科目」の4年間」『神田外語大学紀要』no.18, pp.519-534.
- 藤田知子(2011)「多言語コミュニケーションセンター・事始め～2008-2010年度」『国際社会研究』no.2, pp.217-231. 神田外語大学国際社会研究所発行。217-231

¹³ 英語の ELI のシステムが参考になるだろう。

